

日本結核予防協会と撲滅運動

青 木 純 一

1. はじめに

1913（大正2）年2月11日、大日本私立衛生会会堂において日本結核予防協会の発会式が行われる。日本結核予防協会の設立は、年々その勢いを増す結核に対して撲滅運動の中心的組織として当初より大きな期待を集めていた。その後文字通り結核撲滅運動の中心的な役割を担いながら数々の運動を繰り広げていく。

本稿の目的は、日本結核予防協会における結核撲滅運動について整理し、この運動の特質を明らかにすることである。結論から言えば、結核撲滅運動とは、たんに結核という一つの病いの予防運動ではなく、広く国民の生活習慣や思想にまで及ぶ文化運動であり、いわば国民教育と呼んでもよい質と広がりを持っていたのである。

2. 日本結核予防協会の成立と概要

1900年代に入ると結核の流行は猖獗を極め、予防対策の必要が強く叫ばれるようになる。1908（明治41）年、結核菌の発見者、ロベルト・コッホの来日に際し、歌舞伎座で行われた歓迎式典において初めて結核予防協会設立の建議がなされる。

日本における結核予防対策は、すでに1904（明治37）年に最初の予防規定

である「肺結核予防ニ関スル件」を制定するが、その内容は公的な場所に痰壺の設置を命じた程度の簡単なものである。深刻化する結核の蔓延に対して総合対策の必要が強く叫ばれ、その活動母体として日本結核予防協会の設立が望まれる。

ちょうど時代は日清、日露と続く戦争によって経済は疲弊し、にわかに労働運動や社会運動が盛んになっていた。こうした動きを危惧する政府は、戊申勅書をはじめとして公德心の回復と民衆の不満の解消に力を入れる。そのためには経済的な安定もさることながら、結核をはじめとする病いや流行病の一扫も民心を癒す重要な課題となる。しかし、上下水道の整備といった都市問題は言うに及ばず、工場衛生や学校衛生、あるいは生活習慣の改善も含めた公衆衛生の整備は一朝一夕には不可能であり、またその重大さを一部の役人や医者しか理解していなかった。

1911（明治44）年2月21日、「庶民済世の大詔」が下付され、白十字会や済生会といった慈善団体が次々と誕生していくなかで、日本結核予防協会設立の気運もますます高まりを見せる。1912（大正元）年には「日本結核豫防協會設立ノ趣旨」が出されるが、そこには「結核病ハ總テノ疾病中最モ汎ク蔓延シ最モ多ク人生ヲ害毒スル伝染病」¹⁾であるとして、予防会設立にむけて賛同者を募る。こうして1913（大正2）年2月11日、日本結核予防協会は発足する。

日本結核予防協会は大日本私立衛生会の活動を引き継いで、結核撲滅運動の中心組織として機能する。会頭に芳川顯正、副会頭に佐藤進、渋沢栄一、理事に北里柴三郎、細野順、遠山椿吉、川上元治郎、川上昌保、金杉英五郎、田代義徳、馬越恭平、栗本康勝、矢野恒太、小橋一太、宮本叔平等など、当時の政界、財界、医界の蒼々たるメンバーが名を連ねている。²⁾

内務省衛生局刊行の『結核病院及結核療養所並結核予防会概況』によれば、1919（大正8）年現在の日本結核予防協会の概要は次の通りである。³⁾

【概要】

[会名]	日本結核予防協会
[事務所所在地]	東京市麹町区大平町一丁目
[資産]	22,823円92銭

また、表1は1918（大正6）年度における歳入、歳出の決算である。

表1 日本結核予防協会歳入歳出決算（1918年度）

歳入		歳出	
経常収入	7,089円16銭	経常支出	1,161円62銭
会費	1,493円50銭	俸給、集会費、	同上
寄付金	4,400円	印刷費、会報費など	
預金利子	1,140円66銭		
雑収入	55円		
臨時収入	24,967円57銭	臨時支出	5,083円01銭
結核予防劇収入等		展覧品製造費	
		結核予防劇開演費	
収入総計	32,056円73銭	支出総計	6,7445円63銭

同年の「入会手続」によれば、正会員とは「一時若くは十カ年の年賦にて金參十圓を寄附する者」であり、また、賛助員とは「壹圓以上の寄附者」とある。こうした会費に加えて朝野の篤志家の寄付を主な財源として運営しており、1921（大正10）年には組織強化にむけて財団法人として認可される。⁴⁾

日本結核予防協会とその他の有力な結核予防団体との歳入額を比較すると、大阪結核予防協会（1,737円25銭5厘）、神奈川結核予防会（2,646円4銭）、愛知結核予防会（1,844円82銭）、山梨結核予防協議会（259円71銭5厘）となっており、地方結核予防団体の運営資金は日本結核予防協会の4分の1にも満たない。この数字をも見ても日本結核予防協会は名実ともに全国の結核

予防団体の中心組織である。

3. 予防運動の概要と特色

日本結核予防協会はさまざまな運動を繰り広げるが、以下はその概要である。

- 一 機関誌『人生の幸福』の刊行
- 二 結核予防小冊子の配布
- 三 結核予防宣伝ポスターの配布
- 四 結核予防映画・劇の作成
- 五 結核予防シールの配布
- 六 結核予防歌の作成
- 七 結核予防知識展覧会の開催
- 八 その他

次にそれぞれの活動について詳細を示し、その特色についてふれたい。

(1) 機関誌『人生の幸福』

機関誌『人生の幸福』は「結核予防雑誌の魁をなして、本会並びに全国に於ける結核予防団体の連携親睦を図るべき機関誌としての使命」⁵⁾を担って、日本結核予防協会より刊行される(図1)。当初は年四回の季刊誌にすぎなかったが、1929(昭和4)年頃より隔月誌(年六回)となり、1935(昭和10)年には月刊誌(年12回)として発展していく。

編集は日本結核予防協会理事、遠山椿吉が自ら手がけ、1919(大正8)年における購読料は一部25銭となっている。たとえば『人生の幸福』第6巻(1919年7月)は次のような内容である。⁶⁾

Vol. XII. No. 3

May 1929

THE WELFARE OF LIFE

福幸の生人

JOURNAL OF
THE NATIONAL LEAGUE FOR
THE PREVENTION OF TUBERCULOSIS

號三第年二十第



東京 東ノ丸 行發會協防豫核結本日 法財人團

図1 雑誌『人生の幸福』表紙

(出典)『人生の幸福』第12年3号, 1929年, 表紙.

【目次】

☐ 巻頭口絵

☐ 本会設立趣旨

・ 諸規則 ・ 事業細目 ・ 役員

☐ 国家の危急 日本結核予防協会理事 金杉英五郎

☐ 新制定結核予防法 医学博士 北島多一

☐ 結核予防法施行細則（勅令、省令）

☐ 全国結核予防連合会

☐ 外国結核予防法規及び施設概要（上）

内務省衛生局

☐ 結核予防飛行機宣伝

☐ 通俗結核予防法（続）

☐ 応用消毒法 日本結核予防協会理事長 北里柴三郎

☐ 結核予防居常の心得 北里研究所

☐ 活動写真『一陽来復』

☐ 『誉の出世』

執筆は主に北里柴三郎、金杉英五郎、遠山椿吉をはじめとする日本結核予防協会の中心メンバーや、内務省、文部省の担当係官が手掛けることが多い。内容は結核の予防方法に関する講義にはじまり、結核関係諸法の解説や問題点の指摘、各地の結核療養所からの報告、学校や工場における予防衛生活動、諸外国における結核事情の紹介、消毒方法の解説などのほかに、結核小説、活動写真、結核予防落語と扱う幅は広い。

このほか、当時公衆衛生に関する代表的な雑誌として『大日本私立衛生会雑誌』や結核専門雑誌として『白十字』などがある。

たとえば『白十字』は1911（明治44）年に創刊されが、1938（昭和13）年に名称を『療養知識』と変更し、1943（昭和18）年まで続く。また、のちに

「療養の慈父」と慕われた田邊一雄は1923（大正12）年に結核専門雑誌『療養生活』を創刊しており、その後1965（昭和40）年まで続いている。

二十世紀に入る頃より少しずつその数を増す衛生や療養に関する雑誌や新聞は、1930年頃より急速に普及する。当時刊行された雑誌や新聞には次のよ

表2 主な衛生・療養雑誌や新聞

新聞・雑誌名	出版元	出版元所在地
「博愛」	博愛社	東京市京橋区築地
「済生」	済生会	東京市芝区赤羽町
「健康満州」	満州結核予防会	新京大同大衛民生部
「公衆衛生」	大日本私立衛生会	東京市麹町区
「信濃衛生」	信濃衛生会	長野県妻科實塚
「通俗衛生」	大阪府衛生会	大阪市東区
「保健」	神奈川衛生協会	神奈川県
「さちの礎」	愛知県結核予防会	名古屋市中区
「学校衛生」	文部省	文部省
「更正」	童心房	鹿児島県沼隈郡
「新生活」	自然療養社	神奈川県小田原市
「療養生活」	自然療養社	神奈川県小田原市
「青空」	共生園出版部	愛知県知多郡
「山彦」	新生療養所	長野県
「麗光」	麗光社	福岡県福岡市
「児童と健康」	児童と健康協会	東京市神田区
「療養案内」	療養ガイド社	東京市日本橋区
「健康ニュース」	自然療養社	神奈川県小田原市
「報恩会江北農園」	江北農園	東京市足立区
「芙蓉の友」	日本福祉会	東京市中野区
「福寿草」	第一延命協会	東京市本郷区
「浄風」	浄風園	東京市中野区
「いこひ」	憩い園	東京市中野区
「緑十字」	緑十字会	大連市
「新生」	予防と療養社	群馬県桐生市
「診療」	診療社	東京市芝区
「健康生活」	健康生活社	東京市神田区
「療道」	療道協会	京都市右京区
「健康案内」	療養ガイド社	東京市日本橋

（出典） 白十字会、「日本結核療防事業総攬（昭和13年度版）」白十字会出版部、1938年

うなものがある（表2）。

『人生の幸福』に代表されるように、一般に結核専門雑誌は各地の結核予防団体や療養者によって編集されたものが中心である。たとえば、『芙蓉の友』『浄風園』『憩いの園』はいずれも出版元所在地が「東京市中野区」であるが、これらは当時中野区江古田にあった東京市療養所の療養者が発行する雑誌である。

『芙蓉の友』を出版する日本福祉会は「結核ニ関スル事業ヲ後援シテ其ノ発展ヲ促スヲ以テ目的」とする組織であり、1926（大正15）年に石黒忠恵からの700円の寄付金と看護婦等による積立金1000円を合わせた1700円を基金として、療養所従業員やその関係者が東京市療養所内に創設する。

長期療養を宿命とする結核は患者の医療問題だけでなく、療養生活の背後には数々の経済問題が山積する。そのため療養所職員には療養者の病気に関することだけでなく生活全体を見渡した配慮が要求される。

東京市療養所々長、田沢鐸二は「従業員各自ハ単純ナル“サラリーマン”トイフ觀念以外ニ夫々小ナル社会事業家的精神ヲ有スルニアラザレバ完全ニ其ノ使命ヲ果タシ得ザルモノデアル」⁷⁾として、療養所職員に対して慈善的精神の必要を説くが、公立療養所のように対象が「療養の途なき患者」になるとなおさら深刻である。療養者や療養所職員によって発行される雑誌や新聞は、たんに結核の予防や療養方法を知るだけでなく、療養者の生活上の不安や悩みを交換するための貴重な情報源である。機関誌『人生の幸福』も同様の役割を担っていた。

（3）結核予防小冊子

結核予防小冊子は、1913（大正2）年の『人生の禍根』にはじまり、1939（昭和14）年の『銃後と結核』とまで19冊が刊行される。発行部数は少ないもので10万から20万部、多いものとなると100万から150万部を数えている。これらは個人及び関係団体（官公庁、学校、銀行、工場など）に実費で配布

表3 結核小冊子発行一覧

発行年度	冊子名	発行部数
1913（大正2）年	『人生の禍根』	15万部
同上	『幸の為に』	15万部
1921（大正10）年	『悪魔の生涯』	20万部
1927（昭和2）年	『人類の敵』	10万部
1929（昭和4）年	『児童と結核』	25万部
1930（昭和5）年	『結核読本』	25万部
1931（昭和6）年	『予防衛生・栄養と結核』	15万部
1932（昭和7）年	『結核予防絵入りパンフレット』	30万部
1933（昭和8）年	『療養と予防の早わかり』	110万部
同上	『牛乳と栄養』	30万部
1934（昭和9）年	『凡太郎のお手柄』	50万部
同上	『療養の心得』	30万部
1935（昭和10）年	『結核真髓』	50万部
1936（昭和11）年	『漫畫パズル僕らの健康』	60万部
同上	『改訂療養の心得』	50万部
同上	『健康読本』	20万部
1938（昭和13）年	『銃後の健康』	150万部
1939（昭和14）年	『結核豫防は小児から』	50万部
同上	『銃後と結核』	150万部

（出典）日本結核予防協会『財団法人日本結核豫防協会沿革史』日本結核予防協会、1941年

される。結核予防小冊子の発行年度、タイトル、発行部数を示したものが表3である。⁸⁾

『人生の禍根』に始まって『銃後と結核』に至るまで、日本結核予防協会より発行された小冊子の数はのべ855万部にも及ぶ。この膨大な数の冊子が社会のすみずみにまで行き渡ることによって、庶民の中に少しずつ衛生意識がつけられていく。最初に刊行された『人生の禍根』は次の一節から始まる。

防ぐことの出き来る肺病に苦しむ國は野蛮である。

養生して癒る肺病を、不治と思って悲しむのは時代遅れの人である。

傳染る肺病を、遺傳と云う人は既に古い思想である。⁹⁾

結核は予防可能な病いであり、遺伝ではなく結核菌による伝染病であるという自明のことが、庶民にはまだ十分理解されていない。小冊子は平易な言葉をしつこいほどに何度も何度も繰り返すことで庶民を教化する。しかし、その内容が具体的に効果のある予防対策かといえはいかにも心許ない。

この後段には肺結核の予防方法として、「傳染を避くる事」及び「身體の抵抗力を強くする事」があげられるが、「身體の抵抗力を強くする」ための方法は深呼吸の励行でしかない。

身體を強壯にするには、先ず男でも女でも幼年きときから體育を盛んにして頑丈な身體に鍛ひあげて置くのです。身體の強壯法としては先ず學校の團體的體育のほか、銘々一個人として、毎日深呼吸を行ふことが必要です。深呼吸を毎日怠らず日課として行ひ肺を強くして置けば、萬一結核菌が飛びこんでも、發育繁殖で病氣をおこすことが出来ずに結核菌も遂には死んで仕舞ひます。¹⁰⁾

深呼吸による鍛錬によって結核菌を寄せ付けぬ丈夫な肺をつくるという、今日の医学的見地からすればあまりに安易な知見が当時は通用した。それもこれも結核に対する決定的な治療法がなかったためである。

(3) 結核予防ポスター

結核予防ポスターは通常掲示されたものと結核予防デーのために特別につくられたものがある(図2)。通常のポスターには「結核予防善悪鑑」「結核と戦へ」「毎日浴びよ太陽の光、時々受けよ健康診断」といったタイトルが付けられている。

たとえば、「結核予防善悪鑑」(図3)は大相撲の番付表を真似たポスターで、勸進元「日本結核予防協会」、行司「ローベルトコッホ」として、「東の方」ならぬ「善の方」には、横綱「日光と空氣」大関「楽天快濶」関脇「潔



縣 葉 千

図 2 結核予防ポスターのいろいろ

(出典) 『人生の幸福』第12年第3号, 1929年, 綴じ込み。

横綱		善の方					悪の方					横綱		
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
日光に親しむ	新鮮な空氣	榮養の多い食餌	精神の安定	休息と安眠	規律ある生活	適当な運動	明るい住宅	病菌と弱體質	陰鬱な生活	榮養の不足	煩悶と不安	過勞と不眠	不規則な生活	運動不足
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
治療に専念せよ	良き家庭精神	冷水擦	呼吸器の衛生	胃腸の衛生	節酒と節煙	清潔と消毒	食後の含漱	早寝早起	肺病を予防せよ	寒さを怖れる	標巻を穿る	不規則な飲食	酒と煙草を禁む	口の中は微菌の巢
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
娘を貰ふは健康第一	未乳には母乳が第一	乳母を備へて健康維持	時々小児の体重を量る	病人の衣服は清潔を要す	洗濯した肌を着る	日光に曝した衣類を洗ふ	昼は開けた窓をあけて換氣せよ	移居は衛生に注意せよ	肺病の母は一生不作	人工養育は望むべからず	乳母の病は先づ赤児へ	小児の衛生に不注意	古着は本来に用心せよ	古着の洗濯は慎重に
前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭	前頭
屋外の散歩	正しく安眠	早寝早起	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く	朝食を早く
結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版	結核予防協会出版

（以下を注意しては必ず照を項西悪善）

（以下を注意しては必ず照を項西悪善）

図3 ポスター「結核予防善悪鑑」

（出典）『人生の幸福』第12年第2号，1929年，35頁。

癖」小結「禁酒節酒」と続く。これに対して、「西の方」ならぬ「悪の方」には、横綱「結核菌と薄端な体質」大関「煩悶幽鬱」関脇「不性」小結「規則のない飲食」と続いている。この他に「善の方」には、「深呼吸」「食後三十分以上の休息」「冷水摩擦」などがあり、また「悪の方」には、「儉約すぎる喰い物」や「肺病の痰は火なき爆裂弾」「襟巻厚着」などがある。¹¹⁾

一人ひとりそれぞれ違う予防意識や衛生知識を、視覚的手段によって一元化するためにはポスターは効果的である。「結核予防善悪鑑」は当時一万部を印刷し実費で頒布した。大阪市では湯屋、理髪店、病院の待合室などにもれなく掲示され、おおいに予防意識を喚起したといわれる¹²⁾

ポスターや小冊子から、いろいろな格言や宣伝文句を見つけることができる。「結核の多少は文明の尺度なり」「未開の社會路上の放尿を咎めて咯痰を怪まず」「迷信は自ら作る陷穽なり」のように、近代国家にふさわしい生活習慣の改善を求めて徹底的な啓蒙活動が繰り広げられる。また「人込の都會よりも草深き田舎の空氣に値打あり」「日光の入らない家には醫者入る」「可愛い子には厚着をさせるな」といった格言を使って適切な衛生知識を教え込む。「自然、日光、薄着」を推奨し「都会、日陰、厚着」に警鐘を鳴らす。何十万、何百万枚と配られるポスターや小冊子の役割とは、結核の予防撲滅という本来の目的にくわえて、近代人としての大まかなイメージを満遍なく浸透させることである。

しかし、ときには結核予防ポスターの内容が問題となることがある。1916大正（大正5）年、大阪で開かれた全国薬業記者大会において、岐阜薬海事報は「日本結核予防協会の編纂になれる結核予防善悪鑑なる相撲番付に似たる表を配布したり、之を見るに其の悪なるものに『効能多き売薬』とあり之を売薬の信用を傷くるものなれ」として、ポスター「結核予防善悪鑑」を批判する。結局、日本結核予防協会及び岐阜、広島両県の結核予防協会に抗議文を送ることでその場はとりあえず決着する。

しかし、こうした売薬業界の動きに対して大日本私立衛生会も黙ってはい

ない。

結核予防善悪鑑の悪の方、年寄格の中に記せし『能書き多き売薬』の一項は斯くの如くして売薬業者竝に売薬記者団の反対する處となれり、然れども吾人の考ふる處を以てすれば、『能書き多き売薬』の一面には又『能書き少き売薬』あるは謂う迄もなき事にして『能書き多き売薬』などと、認めしは不都合なり削除を希望すると抗議するものこそ即ち自家の能書き多き売薬を自ら吹聴する意味にも当たれるに非ずや何となれば能書き少なき売薬を発売するものは仮令『能書き多き売薬』は悪なりといわれる、も之に向かつて何等の関する處なければ敢て抗議するの必要を感じざるべし¹³⁾

売薬業者と医者とのあいだでお互いの棲み分けができていない時代には、両者は商売仇である。結核のように民衆に忌避される病いの場合、患者は病気が知れわたることを恐れて医師の診断を受けずに民間売薬に走ることも多い。しかし、当時の売薬にはかなり怪しげなものも多く、このことが売薬業者と医者との関係をいっそう陰悪なものにする。

大日本私立衛生会は医者を中心とする組織であり、また日本結核予防協会は大日本私立衛生会から分離してできた、いわば兄弟のような組織である。日本結核予防協会のポスターに対する医薬業界の批判に対して大日本私立衛生会が反論するのも当然である。

(4) 結核予防劇・映画・落語

結核予防劇『回る春』は結核予防会主催により、原作、久米正雄、監督、小山内薫、出演、無名会東儀鐵笛一座によって、1917(大正6)年5月21日より七日間にわたり丸の内有楽座において上演される。そのあらすじは以下の通りである。

(第一幕)

医学士北村は静子と婚約中、静子は実業家相川に恋し北村は失恋、結核研究のために遊学する。

(第二幕)

静子は相川と結婚後、結核にかかり、相川は事業に失敗し、離婚する。

(第三幕)

静子の女中お咲きは父が結核となり見舞いの途中北村と再会する。

(第四幕)

お咲きのはからいで、静子は肺病院に入院、北村と再会する。

(第五幕)

お咲きは看護婦になる。静子には叔母の遺産が入り、この遺産で新しい療養所をつくることになる。静北療養所の落成式、静子は北村とめでたく結ばれる。

結核予防映画は、日本結核予防協会理事、遠山椿吉自らが手掛け、1920（大正9）年の『悪魔の活躍』（全二巻）に始まり、1935（昭和10）年の『衛生不如帰』までおよそ10本余りが制作される。

結核予防映画『悪魔の活躍』は、今日の虫歯予防のアニメ映画でも見るように「吾輩は結核菌である。人間にとっては恐るべき悪魔である」という結核菌の言葉で始まる。見えない結核菌の悪巧みに対して、果敢に立ち向かう人間達という筋書きである。

結核菌曰く、「やれ人間の大敵だ国家社会の禍根だなど」と云いたて俺達を眼の仇敵にしだしたのだ。人間共は俺達に対する戦闘準備に苦心しているのだ。近頃は結核予防会など、云う団体が至る所に組織され学者どもが痰の中に多数の我々同族が潜伏して居るのを発見して聞くも恐ろしい消毒薬液や日光や火力を以て討伐しやうとしたり其外種々の社会的改良を実行して我々

の根拠を覆へそうと企て、居るそうだ」。こうした映画を動機付けとして、その終わりに「結核予防善悪鑑」などを紹介することで、結核予防知識を着実に普及させようと試みる。¹⁴⁾

また、1921（大正10）年制作の予防映画『一陽来復』は次のようなあらすじとなっている。

古沢家令息と志村家令嬢は数ヶ月後に結婚の儀が整っていた。志村家令嬢はたまたま気に入った古着の晴れ姿を見つけて購入した。不幸にもその古着には結核菌が付着していた。そのことを知らないままに令嬢は感染し結婚式を間近にして不幸にも発病する。結局結婚は延期されることになる。この事実を知った古沢家は一方的に志村家に破談を申し入れる。

失意のまま令嬢は転地療養のために沼津の別荘に向かう。破談に不服があった令息は一目令嬢に会おうと試みるがかなわない。ちょうどその頃令息の友人が医学博士となって帰朝した。専門は結核治療であった。それを知った令息はすぐに友人に連絡し令嬢の治療を依頼した。快諾した博士は早速沼津に赴き治療にあたった。その甲斐あって令嬢は快方に向かい、二人はめでたく結ばれるというものである。¹⁵⁾

予防劇『回る春』や予防映画『一陽来復』のあらすじに大きな違いはない。大切なのは庶民が興味や関心を引くことである。この意味で大衆娯楽の花形である映画を使うことは大きな意味を持っていた。日本結核予防協会によって制作上映された映画は数多い。表4は、その主なものである。

結核予防映画に対する取り組みは、日本結核予防協会以外の団体にも見られる。たとえば、財団法人白十字会が『父の遺産』（全五巻）、内務省衛生局が『青春』（全四巻）、『あかつき』（全四巻）を制作している。¹⁶⁾また、映画や演劇のほかに大衆芸能を使った予防宣伝の試みも行われる。

竹の家素圓による結核予防新落語は、大工の熊さんと町医者との会話で始ま

表4 結核予防映画

制作年度	作品名
1920 (大正9) 年	『悪魔の活躍』(全二巻)
1921 (大正10) 年	『一陽来復』(全三巻)
〃	『再生』(全二巻)
1922 (大正11) 年	『善悪鑑』(全一卷)
1928 (昭和3) 年	『人類の敵』(全二巻)
1929 (昭和4) 年	『自然の学校』(全一卷)
1930 (昭和5) 年	『正ちゃんのスケッチ』(全一卷)
1931 (昭和6) 年	『栄光の日は来る』(全二巻)
1932 (昭和7) 年	『暁の鐘は鳴る』(全二巻)
1933 (昭和8) 年	『地上の真理』(全三巻)
1935 (昭和10) 年	『衛生不如帰』(全二巻)
制作年度不明	『結核予防』(全二巻)

(参考資料) 白十字会「結核予防宣傳映畫一覽」『日本結核予防事業総攬(昭和13年度版)、第二篇「現勢」第二章、第二節』白十字会出版部, 1938年, 及び、日本結核予防協会「財団法人日本結核予防協會沿革史」日本結核予防協会, 1941年、より作成。

る。実は熊さんの女房の様子がこの頃少しおかしい。ぜいぜい言いながらよく咳をする。心配になった熊さんが知り合いの町医者へ相談にやってきたところから話は始まる。

熊 ヘイ、痰にはそんなに毒があるんですかね。だから、忌な奴を獨探(毒痰)なんて呼ぶですね。

先生 ハ、ア、まあそんなものだが、それに一番禁物なのは病人と接吻したり、同衾したりすることだな。

熊 ヘイ、雪隠にへいったり雑巾掛けしちゃ病に悪いんですかね。

先生 雪隠じゃない、接吻だよ。

熊 今年の節分には成田に行きやした、千葉関がああ大きな図体で福は内…。

先生 コレサ、豆まきとは違いますよ。接吻とは口を吸うこと、同衾とは一緒に寝ることだよ。

熊 ヘイ、一緒に寝ると果然(やっぱり)肺病の餓鬼が出来るですか。

先生 爾う限つたものでは無いが、昔は肺病は遺伝するもの肺病の兒は肺病になる。

熊 蛙の兒は蛙になると。

先生 是々混ツ返へしてはいけない。肺病は親譲りの病気として、あの家は肺病系だなど、稱へ、遺伝病として婚約を避けたものだ。

熊 おでんは蒟蒻に限ります是、辛子が利いたか、目に涙と…。

先生 意地が穢ないね此人は…。おでんではない遺伝だよ。学問の進んだ今日では肺病は親譲りの病気にあらずして伝染病である。夫故各々自分で注意さへすれば決して肺病に罹らぬものであると云う事が判つて来たのぢや。¹⁷⁾

映画や演劇のみならず、庶民に身近な落語まで利用して結核予防知識を普及しようとする日本結核予防協会の姿勢からは並々ならぬ意気込みが感じられる。

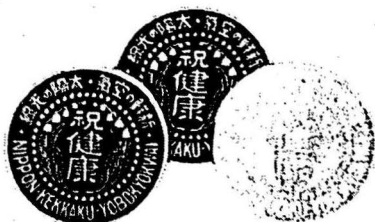
1925（大正14）の結核予防デー実施に際して、日本結核予防協会理事、栗本庸勝、遠山椿吉、佐藤正の三名が落語関係者に会い「落語席亭の協會派及び『むつみ』派の三月例集會に派し同會員に對し豫防デー当日は勿論機會ある毎に談笑戯語の間に聴断に對する豫防思想の啓発をなすべく盡力」¹⁸⁾を求める。幸いにも当時の落語界の領袖である柳家三五楼や一龍斎貞山らは快諾し、すぐに宴席の嚆に取り入れてくれる。

（5）結核予防シール

1926（大正15）年、日本結核予防協会は結核予防シールを作る。このシールは直径20センチの円形状に、青、橙（だいだい）褐色の三色が塗られ、円のまん中には「祝健康」、その字を囲んですずらんの花や葉が飾つてある。シールの上部には「新鮮の空氣」「太陽の光線」と書かれ、下部には「NIPPON KEKKAKU YOBOKYOKWAI」と白抜きで書いてある（図4）。¹⁹⁾その後、



自然療養社が始めて発行した日本最古のシール（1925年）



日本結核予防協会が始めて発行した浮刷シール（1926年）



白十字会最初のシール（1927）

図4 結核予防シールのいろいろ

（出典）『複十字』第9号，1956年，17頁

1928（昭和3）年より全国結核予防連合大会の決議を受けて、結核撲滅運動の財源確保のために再び販売されるようになる。

当時、二十枚綴りの一冊二十銭で販売されたこのシールは、財源確保よりもむしろ結核予防に対する庶民の関心を惹くことに重きを置いていた。²⁰⁾その後、形も縦25ミリ、横20ミリの四角形となり、図柄はクリーム色の地に褐色で健康と均整美を象徴するミュロン作、彫刻「円盤投げ」が描かれ、そのまわりに「祝健康」「昭和三年 THE NATIONAL LEAGUE PREVENTION OF TUBERCULOSIS」と書き込まれ、また、左上には赤い複十字（ダブルクロス）マークが付いている。

販売は東京市内の医者や社会事業団体の幹部、病院、高額納税者、銀行関係者、官庁役員などに対して、直接シールを送付し購入を依頼するという方法をとっており、かなり強引なやり方である。結果は「三分の一は金がいって戻り、三分の一はそのまま返却、三分の一は黙殺」されたようである。²¹⁾

初年度は二万冊を印刷し一万五千冊を売り払っている。日本結核予防協会の寄金芳名者名簿には、佐藤正（1円）、宮島幹之助（4円）、栗本庸勝（1円）、田沢鐸二（1円）などの名前があり、協会の関係者自らが先頭に立って寄付をしている。個人の場合40銭から1円位の寄付額が最も多く、また法人では日本福祉会の480円が最高であり、ついで簡易保険局の50円となっている。初年度の売上高合計は1,903円94銭である。²²⁾

日本におけるシール募金は、1925（大正14）年に自然療養社が発行したクリスマスシールを嚆矢とする。そのシールは縦27ミリ、横22ミリの大きさで「健康、1925年、クリスマス」と書かれた非常に簡素な図柄であり、1シート50銭で販売する。²³⁾また、1927（昭和2）年には白十字会も「健康封緘片」と呼ばれた健康シールを販売する。これは郵便切手大のクリスマスシールであるが、クリスマスのような習慣のない当時の日本ではあまり庶民の関心を呼ぶことはなかった。

ちなみに、世界最初の結核予防シールは結核療養所建設に向けての資金集めを目的として、1904（明治37）年にデンマークのコペンハーゲンで作られる。市の郵便局員、ホルベール（H.E.Holbol）が、郵便切手を真似たシールを販売することを考案し、デンマークはその資金を使って結核病院を建設する。その後、この方法はノルウェーやスウェーデンでも取り入れられ、12年後には欧州全域に及んでいる。またこの運動は1910年頃には米国においても赤十字社を中心に急速に発展する。²⁴⁾

（6）結核予防歌

日清戦争後、国民のあいだに軍歌が普及する。この影響を受けて教育唱歌運動が盛んになる。この流れは結核撲滅運動にも直接影響を与えており、結核予防のための唱歌や予防歌が数多く作られる。次に挙げるのは当時歌われた結核予防歌である。

【結核征伐の歌】（その一）

1914（大正3）年4月6日、全国の結核予防団体が集まって第一回全国結核予防団体連合会を開催するが、会の終わりに結核予防会理事、遠山椿吉作詞による「結核征伐」と題する歌が小学児童によって合唱される。その後全国大会では会歌として歌われるようになり、また結核予防デーなどでも歌われている。

一 あゝ結核よ、結核よ
紅顔美麗の少年も
鬼をあざむくますらおも
もしこの病いにかゝりなば
嵐のまえの花なれや
恐れてもなお恐るべし

二 そも肺病は目に見えぬ

結核菌の襲い来て

強きを誇る體にも

呼吸に障りあるときは

その弱点につけ入りて

つひには病を起こすなり

以下、十五節まで続いている。²⁵⁾

【結核征伐の歌】(その二)

1914(大正3)にも『結核征伐の歌』と題する唱歌が制作され、文部省の検定を経た後、数十万部が各地の教育関係機関に配布される。この歌詞は金沢結核予防協会が募った懸賞募集で一等当選を果たした作品である。金沢医科大学専門学校二年生、橋本学の作詞による。²⁶⁾

一 花も耻らう乙女子も 鬼をあざむく丈夫も

結核病にかゝなば 風前の灯に似たりけり

二 結核病は其菌の 人の油断を窺ひて

伝染り蔓延こるものぞかし げに恐るべき病いかな

三 さあれ結核襲ふとも 必ず不治と悲観すな

眞の手当つくしなば 春は再び回り來む

四 人々常に心して 悪魔の此手來らむも

打ち勝つべき體力を 養ひおくぞとつとめなれ

このほか、予防協会設立の頃に歌われた予防歌や都々逸には次のようなものがある。

【結核予防の歌】

- 一 攻めや滅ばせ結核を遺伝病ではないけれど
かよわい人に伝染行く結核病を平らげよ
- 二 その毒こそは結核患者の痰の中にも
あるいはまた口にさわった笛喇叭筆鉛筆
- 三 そのほか殊に結核病人の咳喇する前に
居る時や痰唾ついた品物を扱う時に注意せよ
- 四 不潔な部屋に寝起きして濁る空気を吸う人や
かよわき人にうつるゆえ身のまわりには気をつけよ

【結核都々逸】

- ほんとに今年は花とはこれよ
清い空気に日の光
いや盃うけぬじあないか
互いに肺の予防から
させばうけずに居られぬ慣ひ
さすなお互いに 27)

【生きよ國民】

「生きよ、國民」は、1936（昭和11）年の秋から翌年の春まで行われた結核予防国民運動において歌われたものである。東京音楽学校に委嘱して作成したこの歌はレコードに吹き込まれ、全国の学校や関係諸機関に配布される。

一 生きよ 國民 身を鍛えて
御國に盡すぞ吾が努め
任務は重く 希望に満つる
花咲く生命を蝕む菌に
犯され捨てつるは罪ぞふかき
吾らの力に病魔を倒せ

二 生きよ 國民 心明るく
輝く日光に すがしき空気
規律を守り働くものは
何をか怖れん 病いも菌も
漲る體力に溢る、希望
豫防の劔に病魔を倒せ 28)

(7)結核予防啓蒙書

日本結核予防協会は、小冊子やパンフレット、ポスターといった方法を中心に結核撲滅運動を進めており、結核予防啓蒙書のような書籍はほとんど刊行していない。しかし、日本結核予防協会の有力会員によって執筆された結核予防啓蒙書は結核撲滅運動を後方から支えている。

結核予防啓蒙書の中で特筆すべき人物として原栄をあげることができる。当時、結核に対する決定的な治療方法のない時代に、大気、安静、栄養を三原則とする自然療法が唯一効果のある療養方法と考えられていた。この自然療法の始祖ともいえるべき人物が原栄である。

原は福岡県に生まれ、1904（明治34）年に京都医科大学を卒業する。1909（明治42）年に欧州に留学し、帰国後の1912（明治45）年に「結核伝染経路の研究」で学位を取得し、その後幾多の療養指導書を世に送り出してい

る。²⁹⁾

1912（明治45）年4月、吐鳳堂書店より最初に出版した『肺病豫防療養教則』は、自然療法の立場から書かれた最初のものである。この本は35年を経た1947（昭和22）年には第61版を数える不朽の名著であるが、裏返せば抗生物質が発見される以前には自然療法以外には取り立てて効果のある療養方法なかったためである。³⁰⁾1921（大正10）年の第17版改訂にあたって自然療法の根本原理として次の6項目が示されている。

- （一）結核菌ノ伝染ハ人類ニ於ケル普遍的現象ナリ、何人モ之レヲ免ル、能ワズ
- （二）結核傳染ハ人力ニテ予防シ難シ、肺病（結核菌）ノ発生ハ人力ニテ予防シ得可シ
- （三）結核傳染ト結核病トハ全然別物ナリ
- （四）肺病発生ノ原因ハ結核菌ニ非ズ
- （五）肺病ノ治療ハ身体ノ自然療能ニ由ル自然的治癒ナリ ³¹⁾

ここで強調する第一は、結核菌に感染しても必ずしも発病するわけではなく、体力や環境によるところが大きいこと、第二は、発病した場合は大気、安静、栄養を基本とする規則正しい生活から得ることのできる身体の回復力こそが最も有効な治療法であるということである。つまり、結局は「身体ノ自然療能ニ由ル自然的治癒」に委ねるしかなかったのである。

原の治療思想は、その後茂野吉之助、田邊一雄などの尽力によって自然療法として確立する。田邊一雄は結核療養者のために啓蒙書や雑誌の出版を手掛け、療養雑誌『療養生活』や『療養ニュース』を刊行する。『療養ニュース』は最盛期には20万部の発行部数を記録しており、啓蒙書や療養雑誌は多くの結核患者の精神的な支えであった。次の表は当時出回った結核予防啓蒙書の例である。（表5）。

表 5 主な結核予防啓蒙書

著者	書名	出版社
鈴木孝之助	肺結核療養法	南山堂
村尾圭介	療養と豫防	不二屋書房
亀井滋常	療養教本	黎明會
原 栄	肺結核患者は如何に養生すべきか	主婦之友社
青木 茂	積極的闘病術	更正社
遠藤繁清	療養新道	實業之日本社
高野六郎	健康讀本	日本結核豫防協会
茂野吉之助	結核征伐	新潮社
徳永規矩	逆境の恩寵	醫醒社
村尾圭介	結核病は治る	佐藤新興生活館
ピアース	療養の友	教文館
中野政平	家庭サナトリウム	療友社
織島秀男	肺結核の豫防と療養	素人社書屋
小坂早五郎	臨床的結核制服術	黎明會
西尾恒敬	結核病とその手當	白十字會
田邊一雄	外氣中の睡眠及び静臥	自然療養社
中村善雄	肺病は斯くすれば治る	主婦之友社

(参考資料) 白十字会, 「日本結核豫防事業総攬 (昭和13年度版)」 白十字会出版部, 1938年

(8) 衛生展覧会

衛生展覧会は結核に関する写真や模型、あるいは統計表などを展示して衛生に関する知識を啓蒙・普及するための催しである。日本における衛生展覧会は、1887 (明治20) 年に大日本私立衛生会第五回総会にあたり築地本願寺を会場に行われた「衛生参考品展覧会」が最初である。この展覧会は当初三日間の予定であったが一日延長するという盛況ぶりであり、四日間の総入場者数は15,000人に達する。その後、大日本私立衛生会によって埼玉、大阪、島根、仙台、名古屋、京都、横浜で開催される。しかし、当時の展覧会は一般大衆を対象としたものではなく、私立衛生会会員やその招待客など一部の有識者に限られており、そのため展示内容は地味でかつ統計表などを使った専門的な内容であった。³²⁾

庶民を対象として衛生展覧会を開催するようになるのは1910年頃よりである。ちょうど各地に結核予防団体が設立される頃であり、結核撲滅運動に対する関心の高まりに呼応している。展示内容も一般大衆の興味を引くものやわかりやすいものを心がけるようになる。ここでは、1913（大正2）年に横浜市で行われた衛生展覧会について、その概要を報告することで雰囲気を知る手がかりとする。

1913（大正2）年10月、横浜市衛生組合主催によるこの展覧会は、神奈川県横浜市勸業共進会の開催に併せて行われる。45日間の開催期間に入場者数は31万9千人を数えており、本元の勸業共進会顔負けの盛況ぶりである。この展覧会については、その後『衛生展覧会』と題する報告集が刊行され、そこから詳細を知ることができる。³³⁾

この報告によると展覧会の内容は大きく次のように分かれている。

- 第一篇 生育部（妊婦や乳児に関する展示）
- 第二篇 保健部（人体の成分、人口、気候、住居、空気、水など衛生環境、食品衛生について展示）
- 第三篇 防疫部（伝染病の症状や感染経路、感染を防ぐための知識などについて展示）
- 第四篇 歯科部（歯科衛生に関する知識について展示）
- 第五篇 治療部（梅毒、ひぜんの模型展示や病気、災害の知識や薬品の種類について展示）
- 第六篇 結論（迷信と衛生との関係や清潔と不潔の知識について展示）

日本結核予防協会は、防疫部の展示品について協力する。その内容を見ると「肺結核感染の経路」と題する絵と結核に感染した肺の模型がある。この絵には、母を結核でなくした娘が本人も感染し、病床で泣き崩れるようすが描かれている。この絵の説明には「肺結核は人生の大敵たり、國を亡ぼすの

悪病たり、幾億萬の生靈を奪い悲惨の状態を現出せしむるも亦本病なり。仮令幸福満て歡樂極まりなき家庭と雖も、一度此病魔の侵襲に逢ふときは忽ち涙多きの不幸と変じ悲哀場裡と化し去らん、慈悲に育てし我子の行末を見ずに空しく黄泉の客となる親あれば、天にも地にも又となき懐しき滋親の嘆きを後に、再び見ゆることの難き彼の世の人となる子あり」³⁴⁾とある。結核の惨状を言葉や文字で伝えるだけではなく視覚を通して民衆の心情に訴えるためには、衛生展覧会に出品された模型や統計図、絵や実物の品々は何よりも効果的である(図5)。

『衛生展覧会』の末章には、展覧会を見学した尋常高等小学校の生徒が感想を寄せている。その中から協心小学校高等科一年、宮崎綾子の感想文を紹介する。

天うらかにすみわたった十月十日、我等協心小學校の生徒一同先生につれられて、衛生展覧会を觀に行くことは何たる幸福であらう。我等は列をつくり、足も軽々しく校門を出立した。いよいよ會場の門前に行つた。參觀者は可なり多く出た。我等は少し待つて後、やがて會場に入つた。陳列物で目についたのは人の子の腹の中にある時の様子。(中略) 齒の悪い子、日常の食物の献立、其の他煙草の害、酒の害、髪のを染めることの害、白粉の中毒など皆成る程と思った。癩病の恐ろしい病氣であることも知った。その次は有毒に菌類、肉類等、貸本又は古着貸屋等に於て消毒の足りない為め恐ろしい傳染病にかかつた圖を見ても驚いた。³⁵⁾

テレビやラジオのない時代にあつて、衛生展覧会は数少ない娯樂の対象でもある。この感想から生徒達が衛生展覧会の見学を心待ちにしていたことが窺える。同時に、衛生に対する知識の少ない子供達にとって衛生展覧会を通して得た知識が、ちょうど乾いた土に水がしみ込むように浸透しただろうと想像できる。

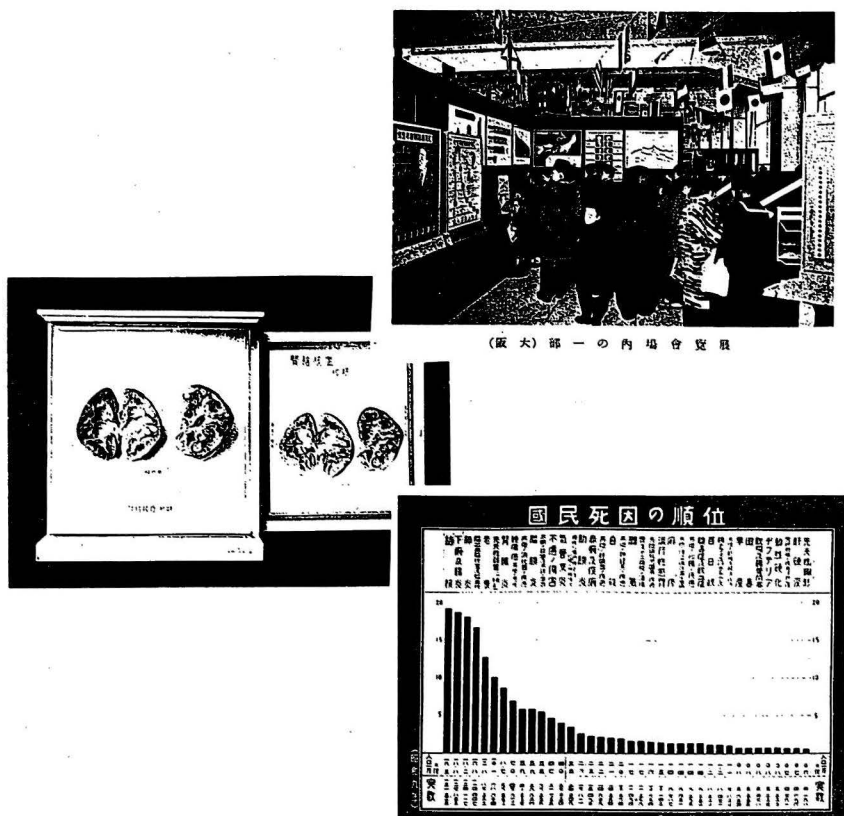


図 5 衛生展覧会展示品の例

(出典) 内務省衛生局「結核予防国民運動記録」より。

日本結核予防協会の結核撲滅運動の内容を具体的に8項目にわたって検討した。この他にも協会は、療養所の建設、医師及び看護婦に対する講習、虚弱児に対する夏季聚落の実施など、幅広く行っている。

4. 結核予防デーと国民運動

1925（大正14）年3月27日、結核予防法制定の日を記念して、第一回結核予防デーが盛大に行われる。前年10月に行われた第十回全国結核予防連合会（宇都宮大会）における結核予防デー制定の決議を受けて、12月27日、全国結核予防連合会は内務大臣及び文部大臣に対して結核予防デー制定にむけて請願書を提出する。そこには結核予防デーの目的として「結核予防に関し公衆の覚醒を促すの目的を以て各種の運動を行う」と記され、協力団体として地方官庁、自治体、結核予防会、赤十字社、医師会、衛生会、教育会、青年団、婦人団体、社会事業団体、宗教団体、慈善団体などが名を連ねる。文字通り結核の予防・撲滅を目指して全国規模で行われた大運動である。³⁶⁾その翌年より結核予防デーは4月27日に変更され、前後一週間を結核予防週間として、以後継続して開催する。³⁷⁾

結核予防デーを報じる新聞の見出しは「空のビラまき 地の辻説法」「健康の象徴すゞらんの花をかざして賑やかに、結核予防デー」³⁸⁾と華々しく書きたてており、また日本結核予防協会の機関誌『人生の幸福』も、なかば興奮ぎみに第一回結核予防デーの様子を伝えている。

朝来曇り勝なる空合はいつ晴れべくもあらず、午前十時頃には細雨さえ齋らしたるにも拘らず、赤十字病院看護婦産婆看護婦組合の女学生及び各看護婦組合の諸姉貳百有余名は市内の要所六十数箇所に於て幸福来の象徴花たる鈴蘭の花を一斉に売り出した。数千臺の電車内には本会制定の予防「ポスター」を掲げ乗車切符には済生会の考案に成る、

我等の大敵結核を、世界の外に掃蕩し勝鬨揚げて一斉に我等の勝利を祝いましょう。

我等の健康祈りましょう。

なる歌謡を黄色に染出した陽光の図案に配し、当日の市電車街上自動車の車掌運転手八千五百名は何れも鈴蘭の花を胸に着けて乗客に結核予防デーたるを高らかに語るものゝごとくであった。(中略) 会旗と幔幕を以て満飾せられたる十八臺の自動車に分乗し本部より左右に分かれ各分担の宣伝区域に向かって出発し六十余箇所の指定花売り場所を巡り宣伝ビラ各種十万枚を通行人に配布し、東京市内を縦横無尽に遺憾なく宣伝した。³⁹⁾

東京における結核予防デーへの取り組みは、日本結核予防協会が中心に行っている。宣伝方法は、通俗公開講演会、パンフレットやポスターの配布、活動写真、唱歌、蓄音機、演劇、予防マークや造花・絵はがきの頒布、少年唱歌行列や少年楽隊行列、自動車や飛行機による宣伝などである。またこの日、町工場などは一日又は半日休業にして結核予防デーに協力するところもあった。ちなみに、日本結核予防協会が結核予防デーにむけて配布したポスターやパンフレット、宣伝リーフレットの数は合わせて五千万枚にも及ぶ。⁴⁰⁾

まさに結核撲滅運動は結核と人類との闘いそのものである。敵は見えないけれど、いくさが今始まろうとしている。まるで軍記物を読むように「出陣」や「赤白十字混成隊」、あるいは「第二次戦」いった物々しい言葉が続いている。

出陣 午後一時、総ての準備成りて高鳴る呼子を合図に自動車のスタートは切られ、四隣歓呼の中から翩翩たる幾條の旗は勢いよく流れた。順路水道橋を渡り左折して一直線飯田橋に出で、此所にいて第一回宣伝戦の火蓋を切った。紅顔美麗の唱歌隊は予防歌の曲を面白く合唱して群衆を呼び

一同き機逸すべからずとばかり、一抱えづゝのビラを片っ端から配って廻った。

赤白十字混成隊 此所にて偶然にも赤十字社の宣伝自動車に邂逅し、期せずして赤、白十字混成隊が編成せられ、爾後終始行動を共にしたのは言語に盡せぬ快心事であった。

第二次戦は江戸川橋にて開始した。早稲田、江戸川音羽方面からの交差点に位置するので可なり人足も繁く各商店を軒並町寧に訪問したる如きは他の所謂宣伝隊には見られ圖ぬであつた。⁴¹⁾

当日はラジオ放送による初めての記念講演も行われる。日本結核予防協合理事長、北里柴三郎は東京芝浦放送で「結核予防の急務」と題して講演する。北里は「従来結核の恐るべき事を深く感じて、遂にこれを忌み嫌らふことのみを、豫防のやうに心得て居る者が多いと思います。これでは、眞の覚醒ではありません。學理の教ゆる所に随つて、衛生的生活をなし、積極的に身體の抵抗力を増進することであります。日常衛生のことに無關心で居て、一朝病氣にかゝつてから初めて驚くのは、文明國民の採るべき態度ではありませんぬ」⁴²⁾と、国民一人ひとりに文明人としての自覚を強く求める。

宣伝ビラは飛行機からも撒かれており、所沢の飛行隊が散布したビラの数には六万枚にも及ぶ。そのビラには次のように書かれてあつた。

豫防の法則は

- 一、榮養（榮養ある食餌し活動の燃料）
- 二、空氣（空氣の値打は戸外にある）
- 三、日光（黄金の光よりも太陽の光）
- 四、運動（一人一日一運動）
- 五、休養（多く働けば多く休め）
- 六、清潔（食前の手荒い食後の含嗽）

結核予防デー当日は全国各地でいろいろな催しが行われる。たとえば学校における取り組みを見ると、春休み中にもかかわらず児童を登校させ校医による結核予防の講話を聞いたあと、全員で結核征伐の歌を合唱する学校があったり、また兵庫県では「結核予防格言入時間割用紙」なるものを作り、449,600人の児童生徒に配布したりしている。

福岡県では、結核予防デーに際し標語を募集したところ5,092名の応募があった。1等になった標語は「一に早起き、二に深呼吸、三に日光強き肺」、2等は「運動と日光は結核豫防の近道」「早期診断喀痰検査費用いらずの豫防法」である。⁴⁴⁾その他の入選作品にも同じような言葉が使われている。

結核予防の方法を、深呼吸、日光、早起き、公衆道徳といった、ごく日常的な生活レベルで訴えることで国民各層に深く衛生観念を根付かせることが、結核予防デーをはじめとする結核撲滅運動がめざした大きな課題なのである。懸賞標語の募集は福岡県のほかに愛媛県でも行われている。

5. おわりに

1939（昭和14）年4月28日、皇后より御内帑金50万円が下賜される。この資金をもとに厚生省は新たに結核予防会を組織する。同時に日本結核予防協会に対して「結核予防會と一元的體制を整備し國民各層に浸潤する本病防遏上萬遺憾なきを期し度き存念に候」⁴⁵⁾として、新たな組織への協力を要請する。これを受けて日本結核予防協会は緊急理事会を召集し組織の解散を決定する。27年にわたって結核撲滅運動の中心組織として活動してきた日本結核予防協会はここに終止符を打つが、あらためて日本結核予防協会の機能と役割をまとめることで結びとしたい。

まず第一は、日本結核予防協会は全国の結核予防団体の盟主として結核撲滅運動を中心的に担っていた。その最大の理由は、日本結核予防協会がすで

に設立の当初より官民一体の組織であり、その活動内容には政府の意向が強く反映しており、また政府の諮問機関としての役割も担っていたためである。会員には北里柴三郎や金杉英五郎、北島多一など、当時の医学界の第一人者が名を連ねており、こうした点も日本結核予防協会を特別な地位に押し上げている。

第二は、日本結核予防協会の啓蒙活動は、機関誌の発行が始まって講演活動、小冊子、映画、劇、ラジオ、落語、予防唱歌、ポスター、シール、衛生展覧会と、当時可能なあらゆるメディアを駆使して繰り広げられる。特に1925（大正14）年から始まる結核予防デーは、運動に参加した人数と、配布されたポスターや宣伝ビラの数からして、ほかに例のない国民大運動である。

第三は、日本結核予防協会の啓蒙活動は、確かに結核の予防・撲滅を目的とするが、いま一方で、旧来の日本の伝統文化を廃して西欧型の文化国家を建設するという意味がある。そのために日常生活のいたるところで平易な格言や標語を巧みに使用して、また、絵や図といった視覚的方法をふんだんに取り入れることによって民衆の意識に無理なく溶け込むように行われる。この点で結核撲滅運動は明らかな文化運動である。

第四は、日本結核予防協会の啓蒙活動は限界を持っていた。それは活動が文化運動や教育運動として位置づけられるように、上からの慈恵的活動の範囲を越えない、いわば官制運動である。そのため現実の結核患者や家族、あるいは貧民に対する直接的な救済や援助といった活動は希薄であり、あくでも政府や国民大衆への働きかけを中心とする運動である。

註

- 1) 編集部「日本結核豫防協會設立主趣並ニ規則」『医学中央雑誌』第10巻、1912年、1393頁
- 2) 主要なメンバーの略歴は次の通りであり、この会が官民一体の組織であることがわかる。

- 芳川顯正（文部大臣、内務大臣）、佐藤進（第三代順天堂主）渋沢栄一（実業家、東京商科大学創設）北里柴三郎（伝染病研究所所長）、遠山椿吉（伝染病研究所所員、結核予防法成立に尽力）川上元治郎（医師）、金杉英五郎（貴族院議員）、栗本康勝（警察医長）、小橋一太（内務省衛生局長）
- 3) 内務省衛生局『結核病院及療養所並結核予防会概況』内務省、1919年、43頁
 - 4) 編集部『人生の幸福』第5巻、1919年、54頁
 - 5) 日本結核予防協会『財団法人日本結核豫防協會沿革畧史』日本結核予防協会、1941年、24頁
 - 6) 編集部『目次』『人生の幸福』第6巻、1919年
 - 7) 小松良夫「結核医としての田沢鏖二」『医学史研究』第35号、1970年、25頁
 - 8) 日本結核予防協会、前掲書、27-28頁
 - 9) 内務省衛生局、前掲書、81頁
 - 10) 内務省衛生局、前掲書、85頁
 - 11) 日本科学史学会編『日本科学技術史体系 第25巻、医学2』第一法規、1967年、140頁
 - 12) 編集部『人生の幸福』第5巻、1919年、6頁
 - 13) 編集部「結核豫防善悪鑑の反響」『大日本私立衛生会雑誌』第393号、33-35頁
 - 14) 編集部『人生の幸福』第5巻、1919年、56-58頁
 - 15) 編集部『人生の幸福』第6巻、1919年、44-48頁
 - 16) 白十字会『日本結核豫防事業総攬（昭和13年度版）』白十字会出版部、1938年、第二章第二節
 - 17) 編集部『人生の幸福』第5巻、1919年、59-62頁
 - 18) 編集部『人生の幸福』第28巻、1925年、40頁
 - 19) 田邊一雄「日本でいちばん結核シールの話」『複十字』第1号、1955年、8頁
 - 20) 日本結核予防協会、前掲書、144-147頁
 - 21) 編集部『複十字』第11号、1956年、4-5頁
 - 22) 編集部「健康『シール』帆布成績」『人生の幸福』第41巻、1928年、59-61頁
 - 23) 編集部「日本最初の複十字シールは自然療養社」『複十字』第9号、1956

- 年, 17頁
- 24) 佐藤正「健康『シール』賣の話」「人生の幸福」第41巻, 1928年, 65-69頁
 - 25) 佐藤正、田邊一雄「日本結核豫防團體發達史(二の一)」「白十字」第287号, 1935年, 7頁
 - 26) 編集部「大日本私立衛生会雑誌」第375号, 1914年, 55頁
 - 27) 小松良夫「わが国の結核-明治から今日まで-」薬時時報社, 1973年, 18-19頁
 - 28) 内務省衛生局「結核豫防國民運動振興記録」内務省衛生局, 1937年, 19頁
 - 29) 原栄の主な著書には次のものがある。「(通俗)肺病豫防療養教則」「自然療法」「肺結核早期診断及治療學」「レントゲン診療講話」(以上は吐鳳堂)
「私は斯くして肺病を全治した」「肺病患者は如何に養生すべきか」「肺病全治者の療養實驗談」「肺病豫防療養教則」(以上は主婦之友社)
 - 30) 福田真人「結核の文化史」名古屋大学出版会, 1995年, 398頁
 - 31) 小松良夫「結核医: 原栄」『医学史研究』第43号, 1975年, 9-14頁
 - 32) 田中聡「衛生展覧会の欲望」青弓社, 1994年, 31-32頁
 - 33) 衛生展覧会発行所「衛生展覧会」衛生展覧会発行所, 1915年
 - 34) 衛生展覧会発行所, 同前書, 177-178頁
 - 35) 衛生展覧会発行所, 同前書, 317頁
 - 36) 編集部「人生の幸福」第25巻, 1925年, 66頁
 - 37) 結核予防デーの日程変更は、3月27日が学校の春休みにあたるため、学童の協力を求めることが難しかったためである。このことから結核予防デーを国民的行事として盛り上げたいとする意図が窺える。(編集部「結核予防デー期日變更の件」『人生の幸福』第31巻, 1926年, 72頁)
 - 38) 東京朝日新聞(1925年3月28日朝刊)
 - 39) 編集部「全國一斉結核豫防デー」『人生の幸福』第28巻, 1925年, 34-35頁
 - 40) 編集部「東京市に於ける豫防デー」『人生の幸福』, 第28巻, 1925年, 41頁
 - 41) 同前記事, 39頁
 - 42) 北里柴三郎「結核豫防の急務」『人生の幸福』第28巻, 1925年, 2-3頁
 - 43) 編集部「東京市に於ける豫防デー」『人生の幸福』第28巻, 1925年, 42頁
 - 44) 編集部「全國一斉結核豫防デー」『人生の幸福』第29巻, 1925年, 21頁
 - 45) 日本結核予防協会, 前掲書, 150頁